女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百七拾六號

當府內無郵稅

郵稅一錢

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

雜 女
The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

No. 176. August 24th, 1889.

EDITORIAL:—An Interview with the Departed Spirits of the Meiji Girl-students.

LEADING ARTICLE:— Editor's Preface to "Froebal's Education of Man."

CRITICAL NOTES:— Life of Mrs. Ito Matsumoto.

MISCELLANEOUS:— The Birds of the Air and the Flowers of the Field. Our Best Friend. The First and the Last. Respect due to the Old. The Poet.

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

HISTORICAL RECREATIONS: — Charles Dickens (III).

NOVEL:— "Heart and Mind." III.

GENERAL NEWS.

第百七十六號目錄

社説 明治女學生の亡靈來り謝す

論説 フレーベル氏教育要礎（井上次郎）

批評 香蘭遺事○小學唱歌教授法○印度の新現象○基督教と國家

雜錄 天上の鳥、足下の花○伉儷は最好の朋友○先進後進○老ひたる人を尊とむべし○詩想

笑草

見鑑

史傳 チヤーレス、ヂッケンス傳（第三）

小説 冷熱記第三章（會離）

寄書 宮島政子を弔す○懷疑論、凡神論、及び北邨散士の流轉

新報 盂蘭盆踊○加藤弘之氏一夫一婦建白論○閑日月○濁世○高等女學生○寡夫及寡婦

片々

WOMEN IN JAPAN.

(1) *A Lady by the name of Matsunaga is agitating Osaka with a harangue like the following: "The Revision of the Treaty is a great question in the Empire. Shall 20,000,000 of our sisters keep silence about it?"*

(2) *The department for girls in "Seisei-Kō" is said to be making rapid improvement in giving the pupils practical training, such as silkworm culture and needle-work.*

(3) *"The Hikari" reports 54 Temperance Societies in the country and gives their names and their relative states.*

(4) *The Ladies' Society of Kochi is preparing to publish a new magazine.*

(5) *Mrs. William Jones has arrived last week with her husband from China. She is said to be an intimate friend of Mrs. Lavens, sister to John Bright and will be interested in the temperance work going on in Japan.*

誌 學

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第十二巻 第百七十六號 明治二十二年八月二十四日

社説

○夏夜陰々たり

殘る暑さ晝は何ほ堪えがたし、朝夙に起き、夜晩く寢ね、朝夕つとめて事を理し、熱情は心の欲する所ろに任す、蓋し天日炎々として砂礫を燒くの時に於ては、何如なる草木と雖ども殆んど其生氣を失なはざるとなし、吾人固より怠たるに非ず、但だ此時に於て活氣の頗ぶる衰ふるを感ず。

若し夫れ日既に西山に近づき、烏空天を横ぎつて歸り、戸々水を灑いで庭前を洗ふの時に至たれば、涼風忽然として來たる、此に於いて乎草木起き、人復活し、万戸千門自づから笑ろふ、童べは走り遊び、少年は快ちよく散歩し、老ひたるは裳を搊げて息ふ、彼等全日必らずしも働らきしにあらず、然れども今や初めて休みたる如し、否な酷熱の節彼等殆んど終日に於て休みたるなり、然れども晩景氣清よきの時に至りて彼等初めて眞とに休みたるが如し、蓋し天の苦熱を下すや亦清風を以て拭ふ、夏時の夕べは實に一刻万春の歡びあり。

而うして日全く沒し、黒夜天地を覆ふの時に至れば、燈火殊に赤くして且つ潔ぎよきの色あり、虫露に吟じ、草珠を綴り、光りの映ずる處ろ庭木極めて青し、吾人於此乎讀書す、論窮す、慷慨す、痛歎す、筆を執つて胸を拂ふ、紙を延べて思を移す、冷々清々たる机邊亦た慣鬪激戰あり、文字相嚙み、意見相撲つ、學窓の靜かなる夜るは、頭腦の尤も忙がはしき時あり。 吾人涙だを揮つて「明治女學生の亡靈を慰さむる」弔文一篇を草し、恭やしく古今女傑の寫眞西面して掛る所ろに供え、一咳して意ろ之を朗讀するの念あり、則はち愁然として立つて俳徊し、庭に出でゝ徐むろに椅子に憑り、天を望みて空しく團扇を弄す、星亦た瞼を動かし、太空且つ涙だを降す、衣うるほひて氣いよ／＼冷やかなり。

時に茫乎として婢め來り、前に蹲踞してシク／＼と泣く、吾人怪しみて問へば彼やゝ頭らを擧て後りへに指さし、語塞ぎて涙だ重し……

亡靈現はる

吾人其方を見れば、燐火陰に燃え上り青くして暗し、濁れる雲蒸々として滯うる邊、三婦人惆然として立てり、婢め飃焉飛び到りて一拜し默して點頭す、何事をか告るに似たり、三婦人相見て喜こぶ、顏ばせ瘠せ、相衰ろへ、髮亂れて物凄で

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

し、則はち衣紋を繕ろひ、微動して幽然、悠然として來る、吾人眠れる如く、夢見る如く、懼ろける如く、親しめる如く、俄かに立ち、睨らみ、笑ひ、迎ふ。 幽然、悠然、三婦人微動して既に目前に到り、尙ほ沈立寂步して進み來る、吾人思はず退ぞき大喝して罵る、然れども聲の聞ゆるや幽かにして甚はだ遠し、三婦人靜止默立、相見て控え、則はち坐す、婢女亦た其後に隨ふて坐す、響きなく音なし、然れども沈靜にして聲あり、光なくして暗し然れども明らかに見ゆ、凪なし然れども木ザワ〳〵として動く、只だ確認す、天地間吾等五人の外に人あるなきを。

默對すること良や久しくして一婦人先づ進み出でゝ申す、其聲糸よりも細し、但だ鐵線よりも强よし、電音の感じ來る如く直ちに吾人が心に通じて云く、妾等もと京濱の女學生なり、一人は苦學して死し、一人は嫁ぎて死し、一人は子を抱ひて死し、伴なふ所ろの婢女は水に投じて死せり、爾來天に登らんとして憂悶散ずるに難く、地に入らんとして遺恨制するに難く、現世に留らんと欲して見る所ろいよ〳〵苦しく、只だ彷彿出沒して空々にさまよひ、魂魄歸する所ろなく悶だえ侍る、忽まち今夜先生の弔らひを辱ふし、恩骨髓に徹してうれしさ禁じがたく、少さか謝辭を呈して且つ妾等が懷ひを聞え奉らんと欲し、斯く恥かわしき姿たを現じて尊容を侵し侍る、願くは纔隙數刻の暇まを賜わり、妾等百世の鬱悄を晴らさせ玉へ、如此くんば同輩世々の功德之に過たるものなく、遺しつる後學への遺言恐らく効なきことあらじ、先づ謹しみて先生年來の御働らきを謝し、高志最も高くして濁世の尙ほ濁れるを悲しみ、幽明分を異にすと云へど常に先生の御影に傍ひ、妾等以下數万の女生謹しみて守護し奉まつる、恐らく天下遂に開け、文明眞に成り、男女各々其地を得て、願ふ所ろの女學極まりなん、其日遙かに遠けれども來るや實に疑がふ可らず、よりて又先づ先生を祝し、後學を慰さめ、妾等が不幸の久しく續がれざらんを祈る、只だ願はくは今夜少さか經歷を述べ、獨り先生に訴たへて鬱を散らし、妾等をして假りに成佛せしめ玉へ。 述べ畢りて幽かに拜し幻の如く退ぞく、其形ち現はるゝ如く、消ゆる如し。

女秀才恨む

則ち年最とも若げなるもの代て目前に見ゆるを見たり、頰枯齒白く色靑くして衰たりと云ども、をとこ氣尙存す、死灰の底一點のけぶれる麻を遺すに似り、顏ばせ赤らまざれど頭ら垂

れ、自づから恥ちたる氣合して告げて申すらく、先生、妾は素と高等女學の生徒にて侍りき、幸わひにして父母の許しを蒙むり、夙とに英學佛學を學び、兼て和文漢書を讀みて、得たりと思ふ所ろ少なからず、密かに西洋各國の女秀才を慕ひて、躬づから期する所ろ亦た高からぬにも候らわざりき、特に文學に望みありて稗史小説を讀むと尤とも多く、感じ知らず〳〵して文明國の世態に熟し、遠く吾國の風習より脱してわれ乍ら驚ろけるとも多く侍りき、然るに伸したる心は最早閉づるに由なく、開きたる熱情は冷たき人と語らふに味ぢなく、自づから吾國風を嫌らひて外國の温たゝかき樣を慕ひ、深く西洋男女の交際睦ましきを羨らやみて、才子を理想するといよ〳〵高くなれり、業畧ぼ卒れども學びの志ざし尙ほ厭き足らず、數度び縁にしの談しはありつれど心に適ふは一つだになく、父母も妾わが申すにまかせて尙ほ少しく學問するを許したれば、之より以後入りて學ぶべき校あるなし、其頃ろ大學に願ひて入學を請へども惣理は何事のありけん許し玉わらず、男子は連りに議論して女に高等の學を要せずと言ひ張、女學生の力らを知らで只だ徒らに輕しみ、固たき理學書に據て高き思想を評し、温たかき思ひを退ぞけ、世は尙ほ頑として變則よみ、東洋ずき、武士いばりの舊僻に離れざれば、妾が一生を托するの人もとより有るなし、則はち小説を作りて思ふ所ろを泄せば、世の人驚ろき賞めて乍まち妾を當世第一の女才と崇めたり、斯て世人いよ〳〵妾を崇めて妾を桒つるといよ〳〵遠く、遂には年少の學士すら妾を見て畏友とし、男子の如くもてなし、妾が心を知れるものなし、多く書を讀めば理想ます〳〵高く、書中の秀才一人も世に存するなく、歡樂幸福小説界に於て殆んど極まり、之を現世に求めて其影だに見るなし、此を以て欝すると知らずして思ひすでに積もり、重さ心を壓して心念深く落入り、醫伯の診するとき最早肉の半身を削り居て候ひき、左れば父母の悲しみ神を泣かすに足り、世上の評判鬼をも退ぞくる如くありけんに、藥は心に入らずして憂欝の汗と化し、醫療効を奏せずして日に〳〵衰ろへ侍りき、左れど妾は念ひ固より變はらず、想像更にます〳〵激し、期望更らにいよ〳〵高まり、任ずる所ろ一層一層に切となり、もだへ痛むと極まりて世をかこつの怨み亦た淺きにあらず、遂に或る夕べ、

悔しくぞ天津乙女と成りにける雲路たづぬる人も無き世に

と吟じたるやう思ふと其儘、身は飄忽としてすでに此世に到

り候ひぬ、あはれ妾は師の恩だに報ゆるとなく、働らかんと極めたる事の一つも得せず、少さか養へる心も托するの人なく、人世文字を知りてより憂ひ甚はだ切にして、十八才は早くも老ひを齎らせ來りぬ、抑も妾は只だ不幸中の一人のみ、彼の妾の如く學び、妾の如く望み、而して或は妾の如く短命にして死し、或は死せざるも尚ほ世に於て生ながら埋もるゝもの幾千かあらん、學は果して身の讎なりや、文明は果して女の敵なりや、世に越えて進むは果して身の不幸なりや、ときに思ひはづらひて今ま尚ほ浮みがたく、亡念執着していとく恨めしく侍る。 遺恨か、痛歎か、悔か、悲しみか、其の涙だ漣々として下り、乙女のすがた暫らく花さく、燃えたる薔薇其灰を現わすに似たり。

佳人泣く

一婦即はち來り之を慰さめて退ぞけ、温靜優肅として曰く、彼女の如きは尚ほ終りを克くしたるものとや云ふべき、妾が父亦た文明の學を學ばせ、妾亦た快活として之を學び、音學奏し、花笑ひ、來客雲の如き而てに出でゝ、卒業論文を演じ文部大臣閣下親づから賜はるの證書を受けたる際みは、早や十分の望み足りて世は只だ樂しきものと思ひ侍りし、然るに妾が母は養ひ親にして父も之に掛念せらるゝが、卒業後喜こびて縁談を定め、其の親戚の何某にと強いて勸め玉へり、妾は亦た一應二應之を辭したれど、父も遂には勸告し、强迫し、嚴命し、先きは學士にして某省日の出の才子たり、上の御覺え、世のもてなし尋常ならず、後の榮達必然なりとて、乘せらるゝ如く荷はるゝ心地して知らざる間に既に彼處に嫁ぎぬ、然るに男子は學びたるが故に必らずしも清きにあらず、開化を好むが故に必らずしも人を重んずるにあらず、其言葉は純然たる文明人なれども其の爲す所ろは依然たる東洋人なり、議論して女權の事を美しく述ると云へど、實際には無學のやさしき夫よりも冷たく、特に有るまじき遊興に耽りて汚らはしき不品行の聞えも少しとせず、省より歸りては酒を飲み早く寢ね、亦た身を研きていよ／＼伸ぶるの望みもあらず、借錢少なからねば奢るとます／＼多く、諫むると折にあれば嫌はるゝと何ゆへか深く、果ては事あるに罵りて打るゝことすらあり、世の夫婦を見れば固より如此き多し、而して其妻はよく之に忍ばるゝなり、妾わ必らずしも人に優りて情剛きにあらず、只だ知れる所ろあるによりて切なかりき、西洋の書物にはかくと説けり、西洋人の交際には如此くす、夫婦の

語らひは斯く爲すべし、其の樂しみは斯くして得らるべし、男女の地位はもとより同じ、女なの務めは之々にて可也、など學び得たるが今まは憂患の種となり、世の婦人が温和なしく順從なるが反りて浦山しくあれり、夫は世間並の夫として或は不可なかるべし、左れど妾わが望み世間並ならねば夫にて安んじがたし、夫は尋常の如く妾を持なし玉ふあらん、妾の安んぜざるによりていよ／＼激し玉ふか、不快不和を生み、不和無言を生み、無言激するときは暴言となり、輕蔑となり、遂には打擲となれり、妾が眼こは悲しきによりてあらず口惜しきによりて泣き、妾わが口は服したるにあらで怨めしきによりて默し、妾わが身は恐るゝによりてならず恨絶したるによりて震ひ、妾わが頭らは謝したるにあらで殆んど死する迄でに怒りて伏し侍りき、斯る時は夫はたゞ棄てゝ出で車にて不潔の埒に走り行けり、妾が終身の友はすでに離れ、妾が半身はすでに姦淫し、妾が愛情はすでに死し、妾が魂しひはすでは去れり、

いかゞせん命は限りあるものを戀はわすれず人はつれなし

妾が肉付ほ生きて彼地にあり、妾が靈すでに早くより此に來れり、腐れたる形體は或は彼の夫の妻とこそなれ、其の學問したる靈は此に參り居れりと。蓋し怨めしの涙だか否な落ちざるが故に涙だにあらず、乾ける泣き、怒れる口、清氣なき亂髪、恰かも刺ある木の枯れて凄れたるが如し。

母 其 子 を 愛 す

時に齡尤も老ひ最初に出でて陳じ暫らく消えたるの婦人、復た忽焉として明現し、二婦人を後ろにして一願し一進し先づ一二滴の涙だを眼穴より落し、先生すでに聞し召せり、彼等實に不幸の甚はだしきものに候はん、左れど妾の如き亦固より此等の苦痛を感ぜざるにあらねど、憂ひ歎みは子を擧くるを止めず、乍ちにして二男三女子を得て候へば、たとひ何如なる劒ぎありて妾の夫婦を斷ち去るとも、此子等に於けるの愛情は切るとかたし、水火せめぐとき最とも苦しとかや、妾が心中つねに怒りと喜こびと、離れと愛着とあり、眼こには遺恨とうれしさの涙を混じ、食は斷ちて死せんとを欲すれども飲ますべき乳は多く出でなんとを願ひ、命は早く終らんとを祈ども子等の成長は指をかゞむるすら待遠し、妾が心はすでに良人より離たり、然れども表てに子等を伴なうときは寧しろ父母之を連れ行くと見せたく、やもめならんとを願ひ乍ら亦た子等に父なしと輕んぜられんとを悲しみ、心常に一

つにして思ひつねに二つ、情けつねに身に留まりて、只だ子等の上に分れゆけり、妾が強いて嫁がしめられたるは畢生の遺恨なりき、左れど嫁がざりしならば彼の愛子は得がたかりき、良人の冷淡慘酷なるは怨めしけれど、子等の之を慕ふを見れば其の愛らしきを屢ば見んと欲す、人生實に苦るし、左れど苦るしくして初めて樂しみあるか、樂しみを得んとするが故に苦しきか、回顧すれば學校のヲルガンの音尙ほ耳に殘りて髮すでに白し、棚につもる小說書は十餘年開きしとなく、家政の書も肉なければ試むるに用なし、必らずしも貧賤の苦しきにては候わず、只だ貧賤にして夫つらければ貧しきと實に百層の苦しみを覺へ侍る、

　結び置しかたみの子だになかりせば何に忍ぶの草を摘まし

左れば先づ擇ぶ所ろを擇み、心を寄する所ろを得、而して若し此の愛兒を有たば其のよろこび何如ほどにか侍らん、然れども人は大率ね苦多くして、當世の女學生は殊に尤も痛まし、素と學びしによりて不幸の淵に入りしや、左らば學ばざるこそ反りて幸わひなりしならん。然るに彼の婢女は當世の女學駸々として進むを聞き、ひたすらに學ばんとを祈りて暇まある每に新聞雜誌を讀みしが、いよ〳〵讀みて其志ざし益々張り、何如にともして其便を得んとするに遂に方法を得ず、靈早く飛びて途通ぜず、思切まり氣少しく狂せしにや遂に水に投じて死し侍りしなり。左らば學ばざりしもの必らずしも幸わいなるにあらず、學びしもののみ不幸なるにもあらじ、妾等只だ思ひ比べて安んじなんと云へば、其の思ふ如くならぬも亦た妾等が女の情にてやあらん、只だ今夜先生の弔文を拜讀して妄執殆んど晴れ、世を去りてより初めて笑ひ、斯く三人ともに參りたるにて候。

　　月は松の梢にあり

吾人初めて安堵し、尙ほ慰さめて曰く、君等怨めどもすでに開く所ろあり、悲しめども早く安んずる所ろを得たり、之れ何よりもの幸わいならん、人は一塊肉にして、夢の如く固まり、眠りの世に轉々す、而して身死するや行く所ろを知らず、彼の肉は果して土となるか、其血は果して冷ゆるか、或は去つて炎々たる地火に入るか、又は冷々たる氷界に落つるか、止みなき風に吹かれて飄々するか、涯りなき洋海に浮びて汎々たるか、詩人古へより想像し、万人今に至る迄で之を想像すれど、未だ其實を知らず、然るに君等すでに幽界に在つて安んずる所ろを得、亦遙かに現世を望みて敎ゆる所ろあらん

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

とす、此れ人間の至幸にあらずや、樂しめるものも死し、泣くものも死し、慕へる夫婦も遂に別れ、愛したる緣り兒も離れざる可らず、同じく死するときは皆な同じきものにあらずや、左らバすでに死して靈に生れたるもの亦何にをか怨むべけん、而して君等怨めども開らき、悲しめども安んず、此れ幸ひの尤も幸わひなるもの也。

壁破れ自づから驚ろく、身は椅子に憑りて、天を望める儘なり、初めて注視すれバ、月ひかり、雲鱗の如く、松黒く、わが影うしろにあり、正に深夜、日未だ昇らず、

思ひやる心尋りはさばらじをあに隔つらんみねの白雲

明朝筆を拂つて記す、文意の明らかならざるは夢を記するが爲め也、八月望後五日女學子識す。

論説

○フレーベル氏教育要礎　井上次郎譯

万物間に一つの永遠なる法則活き且つ支配す、苟くも天地の自然を觀察し、内外表裏の有樣を感悟するの人間には、此の法則或は表てに於て現われ、或は裏に於て現われ、或は生命に於て現わるゝことを確認し得らるべし、而して此の法則は惣べてを支配し、惣べてに通じ、惣べてに力あり、惣べてに活き、惣べてに悟り、永遠永久に存するの一和力なり。

此の一個の大和力を上帝と云ふ、万物皆な此の和力即はち上帝より來り、何物も此の和力即ハち上帝より起元せざるものなし、神は是れ万物の唯一の元因にして、万物の中に常に活き且つ支配せらる、故に万物は只だ神あるによりて存し、神より出るの精を受るによりて存す、之を以て万物に活在する上帝の精は即はち是れ万づの物を活かすの精あり。

左れば此の精を開發し、内に包むの上帝を外に表現するを以て、万物の定運、万物の定務となす。而して人は万物中の尤も靈能あるものなるが故に、特に能く其自己に存するの精、即はち神より出るの精を、十分に、活潑に、明白に悟感し、又此の開發するの其の定運たり一生の務めたることを、十分に、活潑に、明白に悟感し、以て固く決定し、深く自由にして、能く此務を盡し、此精を活かし、其一生の表てに現わすべきもの也。

此の故に教育なるものは、人を、考ふる所ろの、智慧ある所ろの、漸次自發的に發達する所ろの存在者として、此を導きて、上帝の法則を、純粹に、汚れなく、且有感に、自由に表現し得る

所ろのものとなし、又此を教へて如此く表現し得るに至るの途ち及び方便を知らしむるもの也。‥故に教育の目的は信實なる、純潔なる、傷なき、神聖なる生活を活かすにあり。而して此の信實なる、純潔なる、神聖なる生活を爲さんが爲めに、或は知り或は之を適用し、或は悟り或は之を實際にするを以て生ちあるの智慧即はち眞の智慧となす。故に如此く眞に賢こくならんとするは即はち人間最高の望みにして、亦た人間終極の運命を成就する所の者也。之を以て、教育によりて人に存する上帝の精開發せられ、外に持來され、自覺的に悟感せしめらるべく、而して人は其中に存するの神精に、自由に、有感的に從順し、其の一生に於て此の神精を自由に現表する所ろの者と爲らざる可らず。故に教育に要する所ろは、或は教授し、或は教練して、人に、人と自然との共に上帝より來り、上帝によりて左右せられ、上帝に於て存在するとを深く覺らしめ、且つ其覺りを彼が一生に於て効あらしめざる可らず。左れば教育は必らずや、人をして其自己を明知し、自己に關するものを明知し、自然と和らぎ、上帝と一和するに至らしむるやう、之を案内し若くは導き到らざる可らず、斯の如くなれば、教育は人を高めて、自己を知り、人間を知り、上帝を知り、自然を知り、且つ如此く知るとに由て得らるべき純潔神聖なる生涯に至るとを得せしむる也。然りと雖ども教育をして得て此如くならしめんと欲せば、先づ人の内部の如何なるものたるやを深く考究せざる可らず、教育は即はち此の内部に於けるの考究によりて立つ也。而して物の内部に存するの精は、其外部に存する同一の精と、その内部に存するもの丶外に現はる丶ものとによりて認識すべし。左れば教育は元來必らず受動的、循行的なるべし、只た内部の精を守護し、保護するとを專一とす、斷じて之を制し、之を命じ、之を妨たぐるとある可らず、教育は即はち自然に順ふて教授し教練するもの也。

あ丶、庭園草野を徘徊し、牧野山林に吟行するの人よ、汝ち何故に自然の靜かなる教へに向つて其心を開くとなき乎、彼の岩石支障の間だに生長するものは、雜草すら尚ほ其性を伸ばすものなし、然るに其の野に於て園に於て自然に生長するを見よ、其の如何に内部の法則に完全に從ふかを見よ、其の何如に純粹に内部の生ちを現はし惣べての部分惣べての相貌の調和するかを見よ、恰かも之れ地中より發出したる一個の美なる小太陽、輝げる一つの星に似たり。然るにチー世の滔々く

たる父母よ、君等其の兒童の尙ほ柔和なる年齡に於て、彼等が自然に逆ふの事物を强迫し、以て君等と共に不活潑なる不自然なる偏僻に陷いらしめ、斯くして何如んぞ其の美しく開發し、惣べて調和して發達するとを望むべけん。左れば敎育は自然に據りて人の精を自由に發達すべし、干涉する勿れ、强ゆる勿れ、たゞ謹しみて有の儘に開發すべし。

而して人の模範となるの事物は、其の形ちに現われたるの外物によりて能く模範となるにあらず、實に其精、其粹に於て能く模範となるとを得る也、故に聖賢を見て其の外行風采を模範とすべしと信ずるものあらば之れ大ひなる誤まりなり、若し人あやまつて如此き外相を以て倣ふべしとせば、之れ決して其の人を高むるとなく、寧ろ其の發達を止め、抑へ、制するに至らん。此を以て、耶蘇基督は常に其子弟に戒しめて外部の完全に倣ふとを禁じ、直ちに活動し力勉する所ろの靈の完全を以て理想とすべきとを敎へたり。

人間の永久不滅の靈魂なるものは、卽はち此れ神の精の人躰に現われたるもの、神の之を愛し、之に近づき、之に惠むとを印したるもの、卽はち神より之に賜はりたる所ろのものとして尊重せざる可らず、古への信徒の其子を見るや實に如此くなりし。　左れば孩提の兒と云へるも之れ亦た人間世界の必要なる一要素なり、故に姆するものも、兩親も、神に對し、其兒に對し、人類に對し、深く之が敎育の責任を有す、人は天の性、地の性、人間の性を稟けたり、故に亦た上帝に關し、自然に關し、人類に關するの上よりして之を觀るを要す、蓋し彼れが心身には神の和力と自然の異性と人の獨立とを含めり、更らに之を別言すれば、現在と、過去と、未來とを存す。

彼の人類の發達を以てすでに成就したるもの、現に沈滯するもの、たゞくり返し〳〵すものと信ずるは大いなる害なり、如此くなれば子供も後代の代々も、皆な只だ摸倣するものとなり、外形の死したる寫し物となるべし。　子供は實に子供として、神の宇宙の子供として、家族の子供として、人類の子供として開發せしむべし發達せしむべし。　子供をして先づ第一に自己に於て中心基礎となすべきものあるを自覺せしめ、自から其上に立ち、其上に休み、夫によりて動き働らくとを感ぜしむべし、卽はち彼自身の手を以て握り抓み、彼自身の足を以て立ち步ゆみ、彼自身の眼を以て見出し、觀察し、彼自身の全身を用ひて同一に調整に使用するとを覺らしむべし、之れ彼に自覺し、自立し、獨立することを深く悟らしむ

るものなり。凡そ發達は一點より起りて進み、其の引續きたる進步永久に明白なるを要す、彼の幼時と云ひ、少年と云ひ、壯年と云ひ、老年と云ふものを、一々に分畫し、區別あるものとなすは大ひなる誤まり也、皆是れ引續き、連續し、只だ一點に起りて永久に發達したるもの也、故に初にあるものは後にも之れあり、敎育するもの深く之れを覺悟せざる可からず。

太古天地尙ほ混沌たり、上帝上に臨み之に命じ、石と、草木と、禽獸と、人と、各々別箇に生出せしめたり、而して上帝其の形ちに似せて人を造れり、此の故に人亦た上帝の如くに物を作り物を産すべし。上帝の靈、即はち人に寓するの神靈は、當に形ちなきもの丶上に臨み、之に命じて形を取らしめ躰を取らしめ以て各別に其生ちを禀得せしむべし、之れ人の事業の高き意味、深き形容、大なる目的なり、吾人働らきて内部の法則を外面に現わし、外形に生命を賦し、有形に考へを與へ、見えざるものを見ゆるものとし、以て神精を表白す。故に人は衣食の爲に働らくに非ず、只だ其の神精をして外に現われしめ、外形を取らしめ、以て其天來の内部の法則を確證するにあり、彼の衣食の如きは只だ之に伴なつて來るのみ、

野の百合の花は働らくにあらず其の性を伸ばす也、空の鳥は勞するとなし其性を現わす也、而して神之に衣せ之を養ふ、人も亦た如此し、故に云く汝等先づ神の國と其義きを求めよ左らば殘りの者は皆な汝等の上に加へらるべし。

Deep thinking, fearless expression.

批評

○香蘭遺事　星野光太氏編　女學雜誌社出版

此書は横濱二百十二番共立女學校の生徒にてありし松本糸子女史の遺書をば、牧師星野光太氏が編輯して吾社に托し出版されたるものなり、女史の略傳は女學雜誌第百六十五號史傳欄内にあり、實に多く得がたきの信友、孝女、貞婦にてありしに、一朝不幸にして夭折したり、然れども若し此書により て其芳志感化久しく世に遺るを得ば少さか慰さむ所あらん。而して本書は吾社が出版したるものなるを以て則はち細評せざるを例となせども、此書別に發賣せざるものなるが故に、今ま編者が之に跋したる一短文、及び本書中尤も感ずべきものと思へる書東二三篇を抄錄し、讀者諸君が女史を想思し追懷せられんことを乞ふ。

其の良人亦太郎氏に送れる書

○君を愛するの如何に深きや君が語りし言の葉は常に私の胸中に徹し私をして慰と勵とを得せしむ私の爲さんと欲する善事は君を愛する愛情の切なるより成立たざるはなし……君を愛する事は私の身心上有益にして最もよき事なり君の爲に勉學し君の爲に堪忍び君の爲に心を正くし清くする其基礎は神を愛するの心より湧出ずるなり併し君を愛すれば神を愛するの心も亦愈増加するなり……私を慰むる爲めに時々書を投ぜられん事を願ふ私の心是より悦ばしきはあらず君の旅寓の有樣いとしほらしくこそ思はるれ私は之を羨む（下略）

○此身は君を獲するに足らざるも君にまとふの蔦かづらなり君によりて世を送り君によりて悦を得凡て君と共にある事は私の心をして生涯中幸に悦ばしく感ぜしむるなり然れども私も此校に遊ぶに於ては豈只に君に萬事を寄り頼めばとて君を苦しめ君を難ましむる事を好まんや又只に君に對して愛情のみを縷々書き綴りて空しく世を送る事を好まんや願くは彼叙世賓たる婦人の品格を取らん又メレーライヲンの如き人となりを慕はん然れども恐らくは君と共に世を獲する者とならざるを又私の手書は心の愛情のみを以て滿たし只是れ愛は全ての基なりとて全てを棄てゝ情の奴隷となり以て君を予は愛するものなりと自ら得意顏をなし又君は私を以て愛に溺める者なりと想ひ給はれば則ち私の心を滿足するが如き者ならんや云々……

○愛する最も慕ふ良君よ我身は是れ只愛情の奴隷にして一物の心に存するなきに至らんとす學文も世界も身も父母も愛情の一を以て彼はんとす慰むる人も樂ましむる景色も何をかなさん心を安んじ樂しましむる能はざるなり羨ましきは我妹の子が苦しみ惱むをも其身に感ぜざるを（下略）

○月見ればいとゞ思ひのますかゞみ
君が姿のうつると思へば。

其の父松本勘十郎氏に送れる書

私の心配は只一身上のみに非ず第一に今度の製絲場の事に御坐候亦太郎始め右に付て始めより樣子も承り不申に居候所餘程の大事業なる樣子に承り候父上樣は數度の御病後と云ひ他によき代り人もなく又よき支配の方も無き上私家は無人勞瘁ぞ御配慮の事のみ積重り御身心共に御疲勞遊ばさるゝ事と奉存候父上樣一身上のさし響は皆私共子供等の

上に下り候若し右事業を御始め被遊途中にて御身心ともに疲るゝ樣の事ありとても私共子供等は如何とも致方無之只暗路をたどる迷ひ子の如くに有之候父上樣は右大事業中御身を失ひ玉ふとも決して御厭ひなき御覺悟とは御推し申上候得共實によき事には無之候國家の爲め神の爲めに死を輕んずる事は褒む可き事なれども其國家の爲め神の爲めに死する人は身を輕んじ死を物ともせぬ人には無之必ず其身を愛し容易に身を失ふ事は致し不申實に已を得ざる時にさへ逃るゝ道あれば逃るゝは國家を思ひ神を愛する人の爲す處と存候是其時の塲合によればなり私の願は第一ゞ父母祖母樣の御有樣毎も愉快にあればこれに勝れる事はなし私の恐るゝ處は人の家盛を極むれば衰へ滿れば缺くるの世諺の如く缺くるの災來る事に有之候既に私共親戚は不幸に陷り皆悲の極にある事を思ひ申候獨り私共の家の者のみ幸なるは實に恐ろしき事ならずや私は人の家の燒くるを見て又我家の燒くるが如く恐れ居候私共の一家擧て恐れ謹しみ神に願ひ神に任せ可申と存居候 誠に神の信者故僅かの失策も世人の物笑ひとなり易く有之候一家の零落となり不幸の極に沈む事ありても猶國家の利益を計り神の榮光を顯はしたりと誇れる事は言ひ能はざる可し何卒他日の御後悔なき樣呉々も御深慮の上御熟慮ありて萬事御取計被遊度候 私の斯く申は寔に出過たる申方と思召あるかは存じ不申候得共 私の言葉と思し召さず何とぞ父上樣の御良心に問ひ篤と御賢察被下度候(下略)。

(附錄)良人亦太郎氏より女史に送れる書

君が此地に滯在せられし間はいと優なる心もて余を愛し玉ひしを謝す世には婉言をもて其夫を喜ばせ紅顏をもて其夫に媚ぶる婦人多し然れども君は無言にして吾心を樂ませ紅涙を含んで吾心を慰さむ聲なきの言語は力あり涙を含むの愛情はいかでか吾心を勵まさゞらんや此身は不德にして君の愛情を惹く可き者を有たざるに君は何とて斯く切に余を愛し玉ふや君の愛心は何處より湧出せしか余は世人が通常其婦に對する如き淺薄なる心情をもて君に對する能はざるなり恐らくは余れ不才にして獨立獨行世途の難に當るを得ざるをもて恩惠の手は君を余に與へ玉ひしならん君は終生余を扶け余を憂苦の中に慰むるの益友たれ余は神より受けし吾が靈を愛すると等しく吾妻なる君を愛するなりいと子よ恒に心を安んぜよ余には君の姿は薔薇の花に勝りて美し

く見へ君の聲は音樂に優りて快く聞ゆるなり然れども余が最も貴び愛する處は君の品格にあるなり其品格を益々磨きて燦然たる光輝を放たしめよ螢雪の苦を忍びて大に養ふ處あれ只に余が事のみを想ひて憂に沈み玉ふな後來の幸福を完ふせんが爲には現在の幸福を犧牲とせざる可らず。

香園遺事の跋

英國の文學者某氏謂へることあり、英文の尤も美なるものを撰んと欲せば徃いて驛逓局の書束一包を持歸るべしと、蓋し文の精は情を寫すにあり、而して情を寫すとの尤も眞摯有力なる、音信の書状にあればなるべし。われ本文の筆者を見たること二三回に過ぎず、之と語を交えたることも僅かに一度なれども、星野兄により兼て其の人となりを知れることを深しとせず、されど今ま此の書事を通讀するに至りて、更に深く女史の肺肝を窺かひ、益々敬服したり。外國には人の死後其の私書を公けにしたるもの多く、中には良人が其亡妻の書状を編輯して傳を作りたるものすらあれど、吾國に於ては如此き談を聞くを稀れなりしに、今は初めて之を得たり。嗚呼世上幾多の伉儷、よく共に勸むると如此く、能く共に進むと如此く、よく共に勵げむと如此く、固く節操を確立して致意同伴する如此きもの、抑そも何程ありや。日本の男女もし多く如此くんば吾國寳に安し。

明治二十二年八月八日　　巖本善治

吾れ此書を讀み、女史が愛情の切にして清よく、勇ありて且つ優しきの點に於て大に感じたり、然れども之は既に其求むる所ろを得て伸びたり、彼の深底に微光を發したる文才の未だ大ひに發達せず俄然碎けたる別に甚はだ悲しむべき者也。

○小學唱歌敎授法　　東儀季治氏譯　　中央堂發行

米人ジヨージ、ルミース氏の原著を譯し七員行氏の校閲せられたるものなり、唱歌を教授するの必要有要なるとは最早や定論あり、何如なる唱歌の曲を教授すべきやに至りては吾人亦少しく異論なきにあらず、然れども之を教授するの方法何如に至りては知らざると實に多かりき、然るに今ま此書を得て稗益したるところ甚はだ多し、如此ふして教授せば蓋し何如なるものも日ならずして其道に進むならん、然れども縦線複縦線音譜超など云へる文字は可成く平易にてありしならんにはと思へり。

○印度の新現象　　丸山通一氏譯　　敬業社發行

スピンチル氏の嘗て演説せられたる原文を譯されたる者の由、印度の宗教及社會で改革者たるバラマンソマヂーが大事業を述べたるものにて文章亦脈にして力あり東洋諸國は偉人を起す兎に角失望すべきにあらず。

○基督教と國家　　小崎弘道氏著　　警醒社發行

現今基督教を以て國家に害ありとする二種の論者あり、著者は其爲にする所ろありて反對するものを顧みず、專ぱら迷ふて之を誤解するものゝ爲に辨じ、斯教迫害の來歷、斯教の國家及國主に對する要旨、此教と歷史の關係等より叙起し、遂に斯教と我國の將來に就て論辨す、彼の政教新論の粹を集めて之を平易に述きたるもの也、今日甚はだ有益の著たり。

雜錄

○天上の鳥、足下の花　　一のぶ

赤は素より赤し、然れども之に白を映ずれば赤の赤きと一層に赤し、白は素より白し、然れども之に赤を映ずれば白の白きと一層に白し、花の美なると素より美なり、然れども之に枯木を對すれば花の美なると一層に美なり、枯木の雅なると素より雅なり、然れども之に花を對すれば枯木の雅なると一層に雅あり、天は實に高し、然れども九谷の深きによりて彌よ高し、水は初めより平あり、然れども山の笑ふによりて彌よ愛らし、鳥飛んで空に舞へば、短草の葉を開く景色更に面白く、陸蒸氣の走る迅速なれば、農夫の荷を擔ふ樣反りて趣

むきあり、曰く黒馬の黒きは黒炭の黒きに異なると、然り其相異なり相對するを以て黒に二色あり、曰く仁者滅せずんば大盜止まずと、大盜仁の傍わらに存す、之を以て仁の仁たるを知る、見よ天地間のもの何者か相關係し、相照映し、以て其異色を發揮せざるものやある、如此にして万物皆な美なり、而して美なるの万物相合して以て天地中の一大美を綜合するにあらずや。

故に、野に咲ふ百合の花は極めて潔ぎよし、然れども之を紅緑千差の間だより抜去り來れば其色半ば去る、空に飛ぶ鳥は甚はだ高尙なり、然れども之を靑空万里の天上より引落し來り、其足をつかみて其羽を見れば雅趣悉とく失せたり、富士山は雲斷續し、氣晴曇する間だに兀立するを以て美なり、琵琶湖は八景其面てを寫し、嵐山の風細波を起すによりて美なり、若し此等を亞弗利加大沙漠中に移住せしむれば最早國粹とならじ、大臣は雲の上にあるを以て甚はだ貴とく、美人は簾の後ろにさゝやくを以て味わひあり、若し之をして新聞屋に働かしめ、臺所元に働かしめば左程に賴母しくはあらじ、語に曰く、手に取らで矢張り野に置け蓮花草。之を綜合して大觀するが故に美なり、然れども其美は必らずしも大觀せらるゝの時にのみ存するにあらず、蓋し其の單獨にして個立するときも尙ほ甚はだ美なり、否な啻に如此して美なるのみにあらず、單獨にして初めて能く極美の相を現ずるものあり、如此きは則はち其の綜合の上に於て多少の美を犧牲にしたるものあり、試みに荊棘をたどふ朝貌を見よ、旅人或は半顧を與へずして空しく過るともあらん、然れども旅人は寧ろ朝天の野色を惣望し、淸氣潔色極めて快活なりとこそ云はん、蓋し其眼中特に彼の朝貌を納るゝに至らず、然れども吾人若し其の一花を取りて之を示さば、佳人天女と云へども亦た之に接吻して綠髮にかざすならん。見渡せば世界は茫々たり、國は國に於て各々異色あり、然れども日本に西洋人あり、西洋豈に日本人なからんや、一望すれば朝庭に俊才多く民間に貧子多し、然れども若し一々之を注視すれば必らずしも如此くはあらじ、昔し孔明野に隱るれども其野依然として尋常の野なり、コロムエル村に隱るれども其村依然として尋常の村なり、之を村と云ふ素より可なり、之を野と云ふ素より可なり、然れども村野の內豈に偉人豪傑なからんや。

故に宜しく大觀すべし、亦須からく細視すべし、宜しく惣望すべし、亦須からく別見すべし、宜しく頭らを揚ぐべし、亦

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

須からく首べを下ぐべし、宜しく哲學者として考ふべし、亦須からく科學者として見るべし、汝ち見よ野は色づけり、姿と粃を問ふと勿れ、汝ち注意せよ、足下に鳥飛ばん、寸前悉とく暗黒。

○伉儷は最好の朋友　　みどり

彼の極めて仲睦まじき伉儷を見よ、夫は妻を見て天下如此き婦人亦他にあらじと思ひ、妻は夫を見て天下如此き男子亦他にあらじと思ふ、而して斯る熱愛極情のかたらひするもの實に天下に多し、然るときは彼も此如きは他にあらじと思ひ、此も彼の如きは他にあらじと思ふよ抑そも彼等の誤まりなる乎、抑そも彼等の盲愛による乎、抑そも彼等の相迷ふによる乎、曰く決して然らず。若し人深く近づき、切に關係し、互に眞情を開き眞情を盡すときは人々皆な其美なる所を吐開し來る、此時に於て之を見れば万人皆なそれ／＼に他にあるまじき美質を存するもの也、眞正の伉儷は則ち之れを見合へり、彼等の顔ばせ固より双方の癖、傷、を映さゝるにあらず、左れど其眼こは尤も深く双方の最美最深の所ろに穿ち入るが故に、彼等則はち天上天下亦如此き男女あらじと想ひ信愛する也。夫婦ハ互に信任す、夫婦は失望を防ぐ、夫婦は美質を發達すと云ふと、蓋し如此き見解によりて初めて其の言ば味わひを認たゝむ。

○先進、後進　　是空子

維新前の壯士一と度び内閣に入れば、亦た今日の壯士を顧みず、維新前の閣學者一と度び會院に入れば、亦た今日の困學者を思わず、門前の子僧すでに防守となれば雀を追拂ひ、同窓同衾の書生立身すれバ漢の天下でも取りし如く意張る、凡そ昔を忘るゝは忘れ性の尤も甚はだしきものにて、若し人間を記臆する動物なりと云ゝ斯る人は最早人間にてはあらじ。老人は先に生れしゆへに老人なり、先進は先に進みしゆへに先進なり、然れども少年必らずしも老人となりがたきにあらず、後進必らずしも夫より進みがたきにもあらじ、人世もし不老不死の藥あらば、今後元老院學士會院の方々に及び得る英雄は決して出でまじきが、諸老が北邙山下に隱るゝとき、笑つて馬上に其烟を見るの人もあれバ、老人決して獨り專賣の特許を有しがたし、亦もし先進の人必らずいつまでも先進するよ、たとへバ點數の多き人が月給多き如くチャント定まり居るとならば、第一回に大學を卒業したる人はいつ迄も第二回卒業生の上にあり、第三回卒業生はいつ迄も第二回卒業

生に及ばざることもあらん、然るに後なるものが先になり、先なるものが後になること恰かも此れ廻り燈籠の人物相追ひ相逐はるゝに似たれば、先進の諸豪傑決して永遠に誇りがたし。左れば老るものよ安んずる勿れ老ること決して久しからじ、泣くものよ決して絶望する勿れ泣くものは慰さめを得べし、博士よ學士よ得業士よ威張る勿れ續々と學びたる書生が出づるなり、官員よ老人よ紳商よ輕んずるなかれ竹の子はムクムクとして上に伸びるなり。

○老ひたる人を尊とむべし　山下石翁

若き人の老人を卑しむ程ど心憂くきはあらじ、老人は是れ既に世の務めを爲し果て、正に天の許しを得て安息すべき人なり。抑も今の若き人が老人を見て迂なりとするは當然のことなり、之を迂なりとなすことを得るが故にいよいよ老人を尊とまでは過譯なり、其を何ゆえと云ふに、今の老人も決して昔しより老人にあらず、嘗ては花を咲かし、英氣凛々として世に運動したることあり、夫れ今の老人等が一生懸命に働らきたればこそ、世は即はち動き進みて古へよりは大ひに開化したるなり、而して今の若き人は此開化したる時世に生れたればこそ吾等を稱して迂なりとすることも出來、亦時を後れて生れたればこそ吾等を呼て老人とも云ふ也。左れば老人が爲し上たる文明に住ひ、老人が働らきしのちの時世に生れ、而して老人を嘲けりて老ひたり迂なりと云ふ、實に思はざることならずや、抑そも之を老ひたり迂なりと云ふ寧ろ可也、元來老迂なりと認むるが故に即ち之を尊とまざる可らざる筈なるに、反りて之を輕んじ疎んじ退ぞくるに至りては何たる不善ぞ。思はざること驚ろくべく、考がへざること驚ろくべく、恩を知ざること驚ろくべし、斯る無思無考無恩の少年なりと思へばこそ、吾等老人も棄置れず止を得ず亦た復た世に働かんとはする也、吾等もとより吾等が年老ひ時勢に後れしを知れり、たとへば坂に臨んで車を推せしが如し、推せしは吾々なれど車は早くぬ飛行たり、故に吾等決して復たび出たくはなけれど、此樣な少年に任せてはと案じられて又々顔を出す也、固より保守的ならんと自信し好ましくもなし、然し保守は不善を爲よりも善く、破壞するよりも善しと思へばこそ立出る也。願くは世の若者等よ吾等をして再たび出ざる可からざるの不幸に會しむる勿れ、別當貫盛の髮を染るは豈に吉兆ならんや、君等もし相當に老人を優待せば老人は隱居すべし、老人は氣が短う御座る、怒らせては損であらう、宜く鄭寧にあつかはるべし。

○詩想

輕快子

人は詩想に富む。誰にもあれ月を星と見ずに月とあがむる人山を地隆と考へずに山と思ふ者は詩想ありといふべし。常日頃日のたるむまで山をながめ溪をのぞむ人も都に出て丶塵のたつを見れば寧ろ山宿住居の氣樂なるを知る。平生弗箱の中に起臥して銭勘定の外は筆を持たずオールマイチー、ドラアと金銭の奴隷となつて喜ぶ銅臭先生も蜩蟬の聲を聞き谷河の音を耳にすれば俗心はそゞろにきへうせて現に時を忘るゝなるべし。もし足都門の外に出でず眼塵埃に閉がるれば隅田に船を棹すも上野に花を賞するも未だ其詩想を發揮する能はずして止む。人は詩想に富むものなり、唯其詩想を發揮するはそれ山か水か。山に住む人の詩想は仙人風なり水に住む人の詩想は隱者風なり共に高傑の氣に富めども都人の詩想は俗臭紛々たり、耳鄭聲にあらざれば聞かず眼脂粉にあらざれば見ざるが故なり。

○筐底陳言

黑頭陳人

(第一)　精神療治法

腐らなければ毀れる、毀れなければ腐れると云ふのは物質の常ですが人間の精神さへ左様見へます、ですから剛なれば折れるとか柔なれば撓むとか云ひます私が思ひますには仲間同士喧嘩をして居る人は精神が毀れて居るのです又此節世間で噂をするやうに賄賂を受けたとか云ふ人は勿論精神が腐つて居るのです斯様に精神の腐つたり毀れたりして居るのを療治するのは何が必用でしやう私は宗教と云ふ藥劑より外に何もなからうと思ひます。

(第二)　孔子の教

宗教と云ふことに就て儒教即ち孔子の教と云ふことに氣が付きましたが孔子の教は宗教ではありますまいが兎に角私は孔子の教に付て一言したくなりましたそこが陳人たる所以です孔子は支那に於て第一等の道德家です又餘程識見の高い人です私は始終左樣思つて居ます孔子ほど政治の秩序を重んじ倫理の大法を明かにし禮節を正ふした人は西洋に於ても殆んど類がなからうと思つて居ます凡て教と云ふものは理論が六分で實際が四分でなければならぬです左樣でなければ教が立ちませんなぜなれば言ふべくして行ふことが出來ぬと思はるゝ事を出來るやうにするから進歩するのです此事は迚も行ふことが出來ぬとして仕舞つたならば退歩するばかりで進歩することがありません孔子の教は實際が六分で理論が四分ですそれですから後世孔子の教を奉じた人は俗物になつて仕舞いました墮落して仕舞ひました俗物になつてそれで矢張り道に適つたやうに見へるのですこれが孔子の教の疵です。

(第三)　演繹法の人間、歸納法の人間

男子は歸納法の人間です男子のする事は萬事歸納法から成り立て居ります男子は廣く實際の事情に通じてそこで其時代に相應した行を立てるのです、ですから男子のする事に餘り調子の外れた事はありません男子は大胆ですから時としては非常な事をする者もあるやうですが先づ極端に走ることが少いです之に反して婦人は演繹法の人間です婦人は或る點に於ては非常な實際家であるが概括した處では實際家ではありません婦人が先つ眞誠に實際家であるなら世人が皆婦人に政治を任したでしやう、けれども婦人は凡て實際の事に疎くて理想と感情が盛んですから何か道理を考へ出すと直に實行します何か衷情に感ずると直に實行します世人が婦人の性行は變り易いと云ふのも皆此道理ですそれで婦人に實際の事し政治抔を任かすとは迚も出來ないかと申すと決して左樣ではありませんさせぬから出來ぬのでさせれば誰にでも出來ます寡婦を御覽なさい男子に劣らずに一家を治めます又寡婦でなくても一家の主婦となれば皆家政を行ひ升が皆旨く出來て仕損じはありません是迄は政治と云ば男子が擅にして居ましたから婦人は理想と感情ばかりの動物になつて實際に疎い人間になつて居ましたが若し是れから婦人にも參政

播を興へるなら婦人も矢張り實際に明るい人間となります歸納法の人間となります若しも男子が私の申すことを言ふべく行ふべからざる事であると言ふならば男子は今日餘り修徹せぬ所の孔子の流です孔子ならば宜しいが孔子の屑ばかり寄り合せた標準です即ち俗物です。

○きつくても大事ない

煙草をわすれたほど不自由なものはないドレ貴さまの煙草和らかくば二三ぷく下されイヽエきつうござります。ソンナラ一二服下され。

○あすは大雨南無阿彌

兩國へ熊の見世物の木戸番に出るおやぢ今を限りの大病おほどろわげての上言熊じや〳〵とばかり云ふて念佛一遍申さず女房氣の毒に思ひどふぞ臨終の今なれば念佛をすゝめても聞入れず近所のもの共にさま〳〵とすゝむれども只熊じや〳〵とばかりなかに氣轉の男かみ様くらふにさしやんなわしが念佛を申させてやりましうと大きな聲にて是おやぢあすは大雨だぞよ「南無阿彌だぶつ。

○分別のつかぬは夫婦

子息を招き其方とも成長なれば近々嫁をとらずはなるまいし妹どもゝ似合しき事あらば嫁らすならば一人前に百兩あてにしても四百兩入るじよ才はなく精出せども目の前の物入はしる馬にむちじやおきないを隨分油斷なくせいといふ。二男「それは大分の物いり私がよい分別がござりますまづ兄貴の嫁には妹のお百わたしが女房には末子のおきん一ト婚禮に五十兩づゝにしても百兩では仕舞ます左様になされませと云へば親父あきれはて扨々是まではそのやうなたわけとも知らずに居たが言語に堪へた畜生め物をいふもけがらはしとついと立て奥へ入ればあとに殘つて是れ兄貴「なんだ親同士夫婦でゐながら。

○死にぎわに念佛は厭じや

私どもは日々の家業せわしき故に稼の事ばかりにかゝり後生の事はすておきますさぞや未來はろくな所へは居るまいせめて朝晩は念佛の一遍づゝも申たい物でござるそれに引替へお前方はお堂で常念佛をおつとめ唱名の絶間なくさぞや來世はよい所へ御生れなされませうおうらやましい事といへばハテ埒もない事をいわつしやる毎日毎晩の事モウ〳〵あきれはてましたわしが願でござるがドウゾ死にぎわには三日ほど念佛を申さずに死にたふござる。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

兒籃

○駱駝乗アリーの話し　みち子

ハッサンと云ふ一人の駱駝乗がガサと申す所に住で居り始終スエズと云ふ所へ駱駝を引ては沙漠を旅しながら行かいをいたしておりました、ハッサンはひとりの男の子を持ておりましてその名をアリーともうします、例の如くハッサンは駱駝乗をしてスエズにおもむきましたが四五週間を經て家に便りをいたしまた妻は手紙を開て見ますと　次の商隊が（商隊とは沙漠を旅びする時に商人が大勢一つの群を造りますその群の名デス）スエズに來る時に息子のアリーと駱駝を送れアリーの來る迄はスエズに於て待ち居るべし多くの土産も用意せり、などの文言デス、アリーの母は色々考へましたあとでつひに息子をおくる事にきめましたアリーも喜でそれ／＼仔度をいたし常々愛して居りますミーキアイと呼ぶ駱駝をつれて行くとに決し商隊の出立をたのしんで居ますといよ／＼ある日商隊が出立するようになりました駱駝の背には大きな水壺をしよわせそのうちに水を一ぱいつめましたもしそうしないと沙漠のうちで水のない處へ行くとかわいて死なねばなりませんからそのためです、ミーキアイの頸にはよく鳴る鈴を付て置きました、やがて出立をいたして町のはづれ迄まへりますと母はなごり惜しげに見送られアリーもふりかへり／＼とう／＼ガサを遠くはなれました、駱駝はだん／＼進みゆきます多くの商隊はみな話しなどをしてたのしげに歩み行けどたれもアリーにはかまひません、アリーは日頃より強き性質ですからさのみ心細くも思ひません外に話し對手もありませんからたゞミーキアイと話しをするつもりで自分で自分をなぐさめて居ります、太陽が登れば登るほどあつくなつて來ます、晝ごろになりますと皆々水のありそうな影の多そうなところにやすんで息をつきそろ／＼日が傾むく時分にまた／＼出立します、その日はアリーも其他の人々も別に水壺の水は飲みませんでした、なぜなれば近くに小な流がありました故デス。斯様に數日を經ましたがアリーは大そう沙漠のたびは面白いものだと云ふことをさとりましたアリーがこう思ふのは別に沙漠のうちで野蠻人にも出遇ひませんし恐しひと云ふ目も見ませんからの事ですが此處に最とも恐るべき命にもかゝわるような事が起りました、それわ沙漠中の大あらしが起た事です限りも知れないほどの沙地ですから旅する時には前に旅した旅人の足跡をたよりとする計りです故にこの大風が起ると沙を吹ちらすためにその足跡

を埋めて仕舞ひ方がくがさつぱり分からなくありますアリー‖の仲間はその恐しひ目に遇つたのです。

史傳

○チヤアレス、ヂツケンス傳 （其三） ふ、ち、

ヂツケンスが初めて短文を作り Monthly Magazine の社に送りし時編輯者は皆其才に驚き大に畏れ大に望みたり、爾後引續きて氏は數篇を草し悉く Boz の名を以て寄書したり。ボズとは氏が幼弟 Moses の鼻音なり（Moses 又 Boz と通ず）。氏は常に好んでアヂソン氏のスペクテートア或はゴールドスミツス氏の諸作及びアーピング氏の短文を讀みしかば其諧謔の筆は全く是れより來りしなりといふ。

ボズ氏短篇の後に著はせしは有名なるピツクウ井ツク日記(Pickwick Papers)なり、ピツクウ井ツクは氏が初作と云ても可なるものなれど又氏が傑作にして滑稽の奇觀察の密なるは晩年の作に讓らざる事シルレルのロツパアがウオーレンスタイルに又シエーキスピヤのベロナ二紳士がマーチヤント商人に於けると同樣なり。引續きて氏が著述の年曆を擧ぐれば、

千八百三十六年	Sunday under Three Heads.
仝	The Strange Gentlemen.
仝	The Village Coquettes.
千八百三十八年	Oliver Twist.
同	Nicholas Nickleby.
千八百四十年	The Old Curiosity Shop.
同	Barnaby Rudge.
千八百四十二年	American Notes.
千八百四十三年	Martin Chuzzlewit.
同	A Christmas Carol.
千八百四十四年	The Chimes.
千八百四十六年	Domly and Son.
千八百四十七年	The Haunted Man.
千八百四十九年	David Copperfield.
千八百五十一年	The Child's History of England.
千八百五十二年	Bleak House.
千八百五十四年	Hard Times.
千八百五十五年	Little Dorrit.
千八百五十九年	A Tale of Two Cities.
千八百六十年	Hunted Down.
同	The Uncommercial Traveller.
千八百六十四年	Our Mutual Friend.
千八百六十八年	The Holiday Romance.
同	Great Expectations.

右の外諸雜誌のクリスマスの號（日本の新聞雜誌にて年初に特別附錄あると同じく西洋にては十二月二十五日のクリスマスに特別の附錄をつけるなり）及び All the Year Round. に時々寄書せしものあり。

ヂツケンスは實にスケツチを以て名を爲しピツクウ井ツクを

をもて大家たりしなり。ピックウヰックは初め四百部を印刷せしが幾何もなく十五版に上し時は四萬部を印刷したりき。當時にあつては到る處此妙味を喧傳し老少貴賤となく讀まざるはなく、讀んで抱腹或は慚愧せざるはなく、氏が名忽ちの中に千門萬戸の中に騒がし。

千八百三十六年氏はホガース氏の娘を娶り翌年一男チャーレスを擧ぐ、氏は是が爲に家計の乏しきを補はんとてベントレイ雜誌社員となり又チャプマン及ホール書店の依頼に應じ前のピックウヰックにも劣らざるものと苦辛の末にオリバー、トウヰストを著はしたり。當時新たに貧民令發布せられ寺領の救貧職工場の取扱無殘なりしを練達の筆にて物せしなり。殊に此書に於て最も尊むべきは卷中の人物悉く惡人なるにも係らず精神極めて純傑にして惡人を惡人のまゝに描寫せし巧妙なり。世の小説には隨分通常の人物にも不徳の情を寄せ或は惡人に榮華を與へさも面白げに採筆せしも多かるにオリバー、トウヰストの人物は惡人を惡人らしく少しも眞假せずに通篇「罪の報酬は死なり」の意を貫徹したれば人物の不徳に關せず標準自ら高くポール、クリッフオード或はロックウードと對すべし。

ニコラス、ニックルビーは發刊後間もなく五万部を賣盡したり、當時にあつては殆んど無比と云ふべし。ヂッケンスの諸著の中此書の如きは性情の綿密を盡したるものにてニックルビー夫人の博識深文にして賢厚なる敎誨を爲すの妙又奇矯嚴整にして欺騙奸詐を蛇蝎視するの勇氣は最も讀者に投ず。著者の常習にて此書もヨークシャイアの不齊なる學敎を諷せしものなりと。

ニックルビーに嗣ぎて更に一段の進步をなしたるはせ、オールド、キユーリオシチー、ショップにして氏が性情を寫すに最も自在なりしを知るに足る。彼の幼なきネルが苦悩辛酸をなめしは充分に讀者をして哀慟せしめ又スウヰベラア、ナップルス。キルプ等各々其特異質を盡しネルの純粹なるわどけなき心と小供の勇氣を微寫したるは其想像例するに物なし、亞米利加人が氏の才に服せしは此著ありし後と聞く。

千八百四十二年の初め多年鉛槧に從事せし苦を慰めん爲めブリタニア號にてリバープールを出帆し夫人と共に亞米利加に遊び到る處非常の歡待を受けしが英國出版權の米國に行はれずして氏が著書各人に飜刻せらるゝを見て大に不快の念を抱き英國詞友の爲め且は自己の爲めに各地に此問題を演説せし

が到底用ゐられざりき。旅行の結果として現はれしは即ち米國巡遊日記にして概ね滑稽の文字より成れど氏がフヰラデルフヰヤ及其他の各地に於て實見せし獄制に關する意見は極めて着實にして最も有益なるものなり。奴隷廢止につきては氏の説は頗る高傑にして強硬なりき。

小説

○冷熱記

北邨散士録

第三章　會離

斯て六七日過ぎぬ、怒濤の沈まると共に、巖ほの屹立したる、天の破れざりしとの現わるゝ如く、彼の卒然として退去の厳命天外より落來りし當時には、深海悉とく混亂し、舟は何如になりし、溺れたるは孰れぞと云へると、確しかには辨知し難くありしに、此數日の内に霧霽れ、雲散じ、波大方は元の如くなりて、世の風評も既に定まり、新聞紙の指示しも最早誤まらずなりぬ、其時先づ第一に余が眼に認ためたる遠景色は、友人雲井森の身に恙がなかりしは固より、彼は少かさも議院内騷動の事に關係なく、隨ひては退去せられし人々に拘はりて毫も嫌疑を受けざりしと云ふとなり、當日の余が喜こび今に至るも何ぞ忘るゝ能わず。

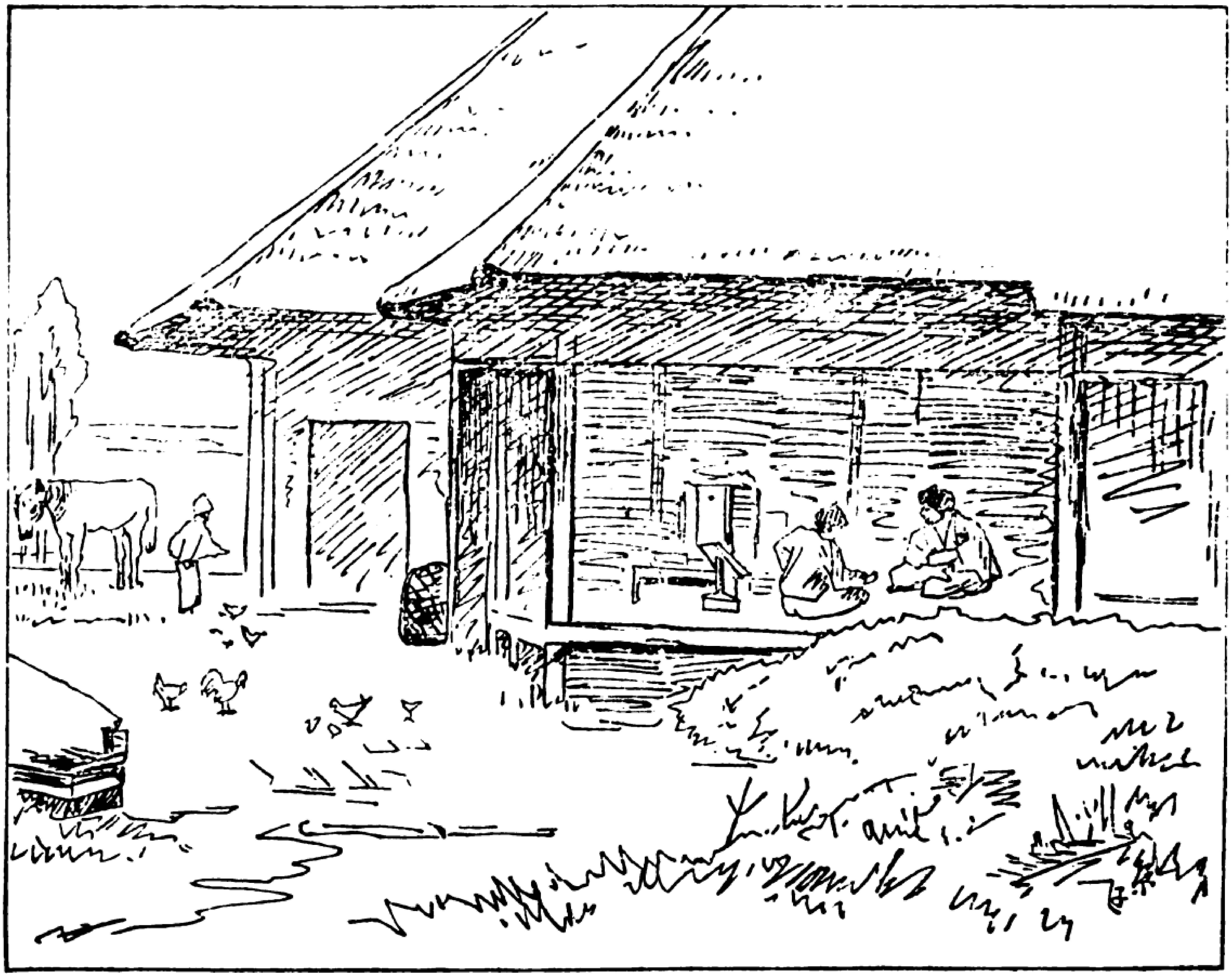
斯かる折りには、雲井は必らず余が許に來りて談論し、或ひは外に洩さゞりし不平を洩らし、或はすでに洩したる不平を繰返して同情を求むるとを常となせば、定めし例の如く馬に乘り、一卷を背負ひ、一笛を腰にし、策を當てゝ高吟しつゝ來るとならんと思ふにぞ、今日か明日かと思ひ待たれて吾知らず心の浮立つを覺えたりき。

扨ても九月二日三日の比ろなりしと記臆す、夕景色特に面白く、野面の緑か、山の青さも一層に目立ち、涼風何處となく吹到る心地得も云はれざりしかば、余は細君に向ひて、嗚呼斯の如き夕べに若し雲井の來らんには何如に樂しからん、見玉へ農夫も早や流れに鋤を洗ひ、烏も鳴きて飛び歸るなり、日毎に之を眺むる吾々にすら、此夕景色は日々に新鮮なるを雲井が見たらんには定めし絶叫して快なりと呼ぶらめ、今日も亦た來らざるは實に殘念なり、抑も何如に爲せしやらんと云ふに、妻も幾度びか野の彼方を望みて、例の御氣質なれば、定めし不幸におゐし方々の家族の爲めに世話などして居はすならん、左れど斯る夕べは亦た家に倔して居玉わぬ質なれば、大方は月を踏んで來り玉わん、よし來玉わぬとも待つ内ぞ樂

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

しけれ、お好な料理でもして用意せんと笑ひ乍ら立出でたり。余も何にとなく嬉しく又々机に向ひてチイツチルスの詩を吟じつゝありしが、妻はリヽーを連れて畠に出で、半ば熟したる唐もろこしをもぎ取りしやうなり、リヽーが之を食わへて椽前に持來りしにて知りぬ、妻は余が工夫したる改良食に賛成し、雲井は此の改良食を甚たく嗜しむを以て、余が畠の玉蜀黍は無類に幸福なるのみならず、余の計畧したる方案も既でに斯く行わるゝ也と微笑しつゝ高慢したり。

果して雲井は來れり、馬を門前の柳に繋ぐや否や、庭口より飛這入りて、北山君と呼んだり、何如なるアーキメデスも何條椅子に安座すべき、亦飛出でゝ握手し引上れば、待ち玉へ〳〵靴を脱でと云ふに、實に然り土足にて荒さるれば吾が盧には外に座るべき所ろなしと大笑したり、妻も喜びて出で來りぬ、リヽーも庭前より首を下げ尾を振りぬ、馬丁も雲井さま馬を洗ひませうかと持成し、下婢も妻の後ろに蹲踞して客あるを嬉しがれり、余は雲井が歸りたる



(二三)

様に思ふ、雲井も大方わが家の如くに思ふなるべし。

暫らくして待もうけたる一品を出す、號は改良食、元の名は玉蜀黍、皮の儘之を湯煮て、粒々に牛酪を塗り、横に搆へて囓ろく食ふ、頗ぶる雑作なくして味の極めて甘きものなり、外にコフヒー、妻が手製のカステイラ、庭に生りし葡萄、皆なわれ先に飲まれん食べられんとて歓迎顔にテーブルの上に安臥す、テーブルを取まきて三人、かわる／＼雑談し、快話し、樂笑したるが余は特更らに近頃ろの出來事に付きて話し初めず、左れば妻も屢々余の顔を見ながら亦た之に付きて何にとも云はず、然るに不思議なりしは雲井ハ例に似ず一言も之に付きて慷慨せず、切りに快ろよげに笑ひぬ。

半晌ほども立ちて日全く暮れたり、妻は去りて燈火の用意を命じ、亦た庭の石燈に火を點じ、今夜雲井が一泊すと思ひてや其仕度など爲すと見えたり、雲井此時頃よりして漸やく厳そかになり、顔色段々に光り、眼ヽ燦めき初めたり。勃然として憤ふり出で、口を突いて彼の退去の事を慷慨したり、彼の云ふには、たとひ政府には治安の爲に非常の令を實行するの權ありとは云へ、之を用ゆると尤とも謹愼にして、其の用うるや寧ろ恐れて之を爲すほどにてあらざる可らず、然るに自らの弱點に襲われて、譯もなき空影にビク／＼とし、たヾ自己の權勢を保護せんが爲めに妄りに此の不吉の權を弄用することそ奇怪なるに、議院令を蹂躙して貴重なる代議士を府外に退去するに至りては、暴逆も亦た極まると云ふべし、吾々は固より不穏を好まざるものと云へども、大ひなる安隱を維持せんが爲めには一時の平和を破ぶるとも決して不都合にあらずと信ずなど、頗ぶる激昂して論じたり、余も幾分かは賛成する所ろなきにあらずとは云へ、雲井の氣質を知るが故に特に落附き、君が論固より正しと云へども、たヾ純全の正理を望みて政事を論ずるときは危険なきにあらず、之をたヾ君が心中に於て思ふは可也、亦た之を余の如きものに語るとも害あらざるべきが、萬一其慷慨を尋常の年少氣鋭の人士等に洩さば、此れ火を以て火を焼ものにして、何如なる珍事の出來せんも知れず、彼の内亂と云ひ、暗殺と云ふものヽ如きも、多くは一時に思切りて遠き慮ばかりなきものヽ手に成ると多しなど、辨じたるに、彼れ大に激し非常に怒るさまにて一層に高聲になれり。

余と雲井の間たは骨肉も啻ならず、然れども其交わりは只だ爭ひなき佛の如き交際にてあるにあらず、凡そ相見て論ずる

ときには大抵意見の異ならざることなく、意見の異なるときに於て差控へて論ぜず濟せし如きとなし、雲井は機を見ること早けれども極端に走るの僻あり、物事を強く感ずれども一部分に偏よるの僻あり、義に勇さみ不義に憤ほれども社會の大法進化の順序等に頓着せざる僻あり、人を助け慈善を爲すに極めて信切なれども干渉保護に失し反りて他を弱くするの僻あり、平民に黨し階級を嫌ひ虚飾を惡み過度に貴族を攻撃し特更に習慣を破らんとするの僻あり、自由を愛し國を愛し國權擴張に熱心なれども西洋人又は外國と云へることに付て不公平に流るゝの僻あり、而して余に多少の得たる處ろ及び大ひなる僻ありとせば、則はち全く之と表裏を爲し、恰かも彼が凹凸と余が凹凸と相合し、相繕ふの思ひあれば、意見合せず、爭ひ多きにも拘はらず、互ひに敬愛して實に一身の如くに感ずるあり。

左れば此時にも内亂、暗殺、と云へるものゝ利害正否に付きて大ひに論じたり、余と云へども固より常久に内亂、暗殺、を不可なりとするにあらねど、此等の利益あるは決して今の時代にあらずと信じたる也、内亂とは、言論の爭ひ、議院に於ける爭ひなどの追々に募り來り、凡そ何如なる不和手段にても最早改革は出來がたしと云ふに至りたる日、初めて革命の戰と稱して之を行はんと決して不正にあらず、然し如此き戰はたとへば山の頂の如し、此の頂に達する迄には種々の勘辨も、種々の盡力も仕盡して、此上は劒を拔かざる可らずと云ふ頂點に達して則はち一轉一折して打降ることあり、又暗殺は上に政府なきか、又はあるとも世の順序大破したるを調ふると能わざる如き日に於て或は効あるべし、古來暗殺によりて何如なる利益を得たるかを知らず、好し一時一世は其の利益ありし如くなるとも、後ち之に倣ひて誤まつて多くの卓人を殺したることを思ふときは、勘算して殆んど其利ありしを知らず、故に暗殺の如きは内亂に比しては更らに尤も制止すべきものと信ずるなり、余常に如此く信ずるを以て強く雲井に反對して其考を述べたれども、凡そ此夜の討論は、雲井も只だ其利害正否を理論上より論じたるにあらず、余も亦た只平常信ずるまゝを辨じたるにあらず、彼も何やらん意あるが如く見えたれば、余も亦自づから論外に渉りて強く反對せしあり、左れば常には笑ひ乍ら之を聞く所ろの妻も此夜は特に掛念して傍聽しぬ。

思はず議論長くなれり、此夜は無論止まり玉へと云ひ、妻も

既に其用意したりと云ひたるに、雲井は是非とも歸るべき用務ありとて惆然立上り、固く握手し、亦た妻とも握手し、切りに緩慢に靴を結び、馬に跨がりて一顧し再顧し、遂に立歸りたり、余は妻と共に默して遙かに見送る、月下に人馬の影たゞ緩やかに行くを見たり、影全く見えずなりぬ則はち遠く笛聲を聽く。

寄書

○宮島政子の死を弔ふ

嗟乎余か眞友宮嶋政子逝矣實に人世は果敢なきものかな衆木に擢つるものは風伯に憎まる限りあれは吹かぬも花は散るものを心短かき春の山風こそ憾みなれ」回顧すれは今年如月の頃かと覺ゆ余は當時郷里婦人社會の有樣を目擊して轉ゝ慨慨に堪へさるものあり是ぞ眞正の婦人なれと云つへき人物のなきを遺憾に思ひ如何にもして模範ともなるへき女性もかなと思ひ居る折柄ある友人より始めて君か名を聞きたりしなり大旱に雲霓を望むの當時余の喜ひ如何ばかりぞや盲龜の浮木優曇華の花も啻ならさりしなり然れとも此の喜ひを得ると仝時に余に甚しき慾を送りしものは君か病牀にあることなり國手も匙を投せしとの事なり余の喜ひの大なるに比例して憂悶も亦一層甚しかりしなり嗟如何にせはやさて一時は思ひ惑ひしかと大能の祐助を仰くに若くはなしと數十の兄姉と申合せて只管主の前に熱血を吐露したりき余は當時確信したり信するものに於てなし能はさるなしと爾來予は朝夕主の前に出る每に未た嘗て君を喚起せすんはあらさりしなり然れとも余は心中隔靴搔痒の感なき能はず君か病牀を見舞ふて予か心情を吐露し併せて君か意衷をも叩かはやと思ひしかと浮雲障遮として遂に日光を被すに由しなりき余は悟れり世の友ならはいざ不知君の余に於けるは俗世の假友にあらて靈界の眞友なるものなと余は一度も君の謦咳に接せすとは云へ主の前には朝夕相交りしなり幸ひに君か親戚某氏は余か知人なり依つて君か病狀を聞き又君か信仰の愈堅固なるを聞きて心窃に慰むる處ありしなり君か流ゝなる氣息の下に「早く全快して郷里の爲に働きたし」と常に某氏に語りて一言の葉は今思ひ起すたに轉悲痛に堪へさるなり爾來茲に半星霜君か病勢漸く劇を加へ遂に去ぬる六日傾く日影と共に溘然主の手に擧けられぬ」君の訃報に接するや余か身は不知增上寺畔松杉鬱蒼たる下にありし嗚死よ汝の刺は如何に鋭利なる今春余か愛友を將去り今又君を將去る無情にも程なこうあれ夫れ然り然れとも汝の谷汝の川は遂に君を留め能はさりしなり君は今や主と共に樂園の門に入りしなり主は君か如き忠實――溫雅――博愛――の淑女を長く泡沫夢幻の濁世に苦めんよりは寧ろ永遠の春に絕へせぬ花の御國に取り給ひしなり主は吾人の祈を聽き給はざるにあらす吾人は主の意を知らさりしのみ――凡ての事よからさるなし、君か長逝は予をして人世の實相を諦觀せしめたり君の長逝は余の信仰と望とに於て著しき進步を與へたり豈只余のみならんや此間幾百の君を知り君か爲めに祈りし人ゝは皆恐らくは全感なるべし果して然らんには君か長逝は豈徒然ならんや否君か長逝は生命ある主の一大說教なるべし況んや余が郷里幾多の姉妹か君か事を聞き爲めに感奮興起するに於てをや君か靈以て慰むる所あらん嗟乎又何をか言はん在天の靈庶幾饗焉

君不見此樹朝霜葉　俟得春陽香欲蕉
昨夜東風穿尤微　無端掠去孤影寒
飄來濟世與夢伴　昨日紅顔今髑髏
只有人間別眞境　淸流深處伴閑鷗

君が眞友　樵溪生　涙を揮ふてしるす

○北邙散士の「流轉」及び凡神論、懷疑論。

森川一閑生

悠々然として凡神論を講し懷疑說を究めんと欲せしか是れ蓋し哲學家に於て妙味あり洒然として炎熱の候又消暑の助となる可し然れとも又一方より見れは哲學的議論の如く啖を催さしむるものも非らざる可し余が茲に書き出ださなんとする一條は敢て大事件にあらず凡神懷疑論を常々と純正に論ずるは秋風颯として氣冷かなるの時を待つ今は只其一端を言はんのみ。

夫れ凡神論「パンテイスユース」とは即ち希臘語より來り「パン」は總ての義にして「テオス」は神の義なり其の意は萬物是れ神なりと云ふにありて凡神論は神

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

と世界を同一視し世界を以て神の顯像となす然るに世界は新陳代謝變遷無常なれば是れ神の眞体にあらず神とは世界の變遷中にありて敢て變ぜざるものなりと說く即ち「エレア」哲學派が云ふ一なり佛者の眞如なり若し「プラトン」の語を借り來れば「アイドス」或は「イデア」是れなり而て此の議論を以て只學說となしおかず實際世界に應用すれば其の結果如何「プラトン」曰く哲人は眞美の想を觀ると故に氏の倫理に曰く至善とは五感世界を脫了するなりと此の語中には實に遁世主義を含有するものと云ふ可し而して何が故に哲人の志操は此の如きかと云へば是れ見安きの理也目前に横はるまゝの世界は常に變化不斷の間にあり眞相ならざれば是れを贋物と思ふは哲人の行爲にあらず哲人は五感世界無常世界を遊絕して「アイドス」世界に進入せざる可からざればなり「プラトン」元より凡神論者にあらず然れども推論の結果は凡神論者と同じき所あり（理想的凡神論）若し吾人凡神論の如何なる實際を顯すかを知らんと欲せば宜く印度の宗教を觀察す可く佛が「ニルワナ」に入ると云ひ佛者が遁世するも皆凡神論に發源す。

懷疑論即ち「スケプチチスムース」とは希臘語の「スケプシス」疑なる語より來りて疑を抱く論者を云ふ、何を疑ふか純粹の懷疑論者は眞理の人間に探知し得らるゝを疑ふものにして眞理は人間の認識し得可からざるものと說くの論客なり然れども只疑念のみを抱て日を暮らすは人間の爲し得可きとなるやと問ふに敢て然らず一事一物を爲さんと欲せば是非善惡を定めて彼爲さざる可からざるもの比々然り故に懷疑論者も亦實際世界にありて行爲の標準を定めざる可からず故に其の實際論即ち倫理論に於ては人は成る可く世界と調和の生活を爲す可し世界の與ふる所之を取り與へざる所之を欲望せず是れ人間の道德と幸福を增進すと如此は希臘末代の懷疑の論者の所論なりき。

右は凡神論と懷疑論の一面なり、凡神論は出世間的の人類厭世家を造り懷疑論は一の堂々たる意見なく世界の發酵素となる可きの力を藏貯せず。

人あり余の何が故に此の小言を陳ぶるかを問へり蓋し余頃日の暑熱を凌ぎ兼つゝありける所に國民之友第五十八號發兌せり又之に附錄を加ふ而して附錄は暑を凌ぐの妙藥を含貯すと聞き購ひ來り讀む讀んで北邨散士の流轉に至る又之を讀了す讀了て此の流轉中には凡神論者と懷疑論者との代表者あるを認めたり實に畑野賴方とは懷疑論者なり林は語る言葉に「我々は浮世の事は何も彼も云々（八十一頁五十三行）とあるは樂天敎（ヘドニスムース）主義の如しと雖とも後に「人間の働は時には云々（八十二頁下一行）の言葉によれば樂天主義と云はんより懷疑主義より生し來りたるものと云ふ方適當なる可し此の考を補ふて力あらしむるものは「殆んと天と一体（八十一頁七十八行）の語なり茲に謂所天とは懷疑論者の自然又世界を云ふものなる可し故に賴方は安閑として又無爲以て世界と調和するの人物なり而して林が凡神論を取りて厭世家たるは是れ喋々を要せずして明かなり讀者は必ず讀んで林を道德高尙淸淨潔白なる高僧となす可し蓋し智恩院の邊に住せし（七十六頁下十七行）感化力、實に居士が此の編に於て哲學論系の實際論を人物として示されしは余の如き小說の小の字も何のことか解し能はざる偏屈者をして大に妙なりと呼ばしめし所にして凡神論懷疑論の小言を陳べしゝめし所なり而して又た淸淨を感ぜしめたり顧慮すらく凡神論懷疑論は實際の世間に適應す可きものなるや夫れ懷疑論者は安きに居るが如くにして未だ安きに居らざるものなり只敢爲の精神なく爲力なしの爲し力のみ智ある人を生れし上は林が所謂「豚となりて樂むよりは人間となりて苦しむが勝る」とするの論遙かに高尙にして人の人間たる價値を保たしむ可し然らば理想的凡神論は如何余敢て又喋々せず只問ふ林の如き厭世主義（淸淨なるは尊ふ可し）にして社會を形成し得るか人間は社會的の動物なり厭世主義此の天性に適するか、亞細亞に聖人あり「エス」と稱す謂へることあり「哀しむ者と哀しみ樂むものと樂しめ」と是れ處世の中庸なりと云ふ可し大なる哉言哉。

（右は敢て流轉を何のかのと言ひし理に非ず只此の小說を讀て觀念連合の作用凡神論懷疑論を想ひ起さしめしなり）

新報

○盂蘭盆、盆踊

田舍の安息日は一六に在り、明日にあり、お祭にあり、田植後にあり、而して其尤も面白がらるゝは盂蘭盆にあるなり、若し開化するほどいよ〳〵安息日を大切なりとせば、田舍の安息日も亦た必らずしも輕ろんずべきものにあらず、然りと雖ども、淸く守らざるの安息日は多くは之れなきの優れるとあり、況んや此日に於て特に尤も不經濟なる、尤も不養生なる、尤も不道德なることを行ふに於てをや、盆踊の如き即はち其最惡なるもの也。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

然るに今に於て尙ほ依然として之を樂しむものなり、特に彼の學生、更に甚しきは彼の女學生に至る迄で尙ほ依然として之を樂しむものあるに至ては何たる怪事ぞ。德島日々新聞は曰く「只夫れ此細の事として看過し難き者は風俗紊亂の一事なり此事に就ては予輩之を筆するに忍びず何んとなれば筆穢れ紙汚るゝの恐れあれば也只一言せざるを得ざる一大事あり我德島高等女學校生徒の過半も亦此汚穢なる群集中の一分子なると即はち是也」と、噫慨歎すべし。

○一夫一婦の建議

加藤弘之氏の講述に成る天則第六號に、一夫一婦の建議を贊成して左の如く論じあり。

近日數千名の男女相議して自今一夫數婦の陋風醜俗を禁し一夫一婦の美風正俗に歸する様新に法律を制定せられんことを政府に建議したりと云ふ蓋し一夫數婦の陋風醜俗か文明社會に適せすして社會の安全と幸福と進歩とに大障碍あるは余輩か常に論辨する所にして今更喋々を要せさるとなるか併し此陋風醜俗を矯正せんに到底法律の力のみを以てする能はさるは甚た明瞭なる事なれは世の論者は今般の建議を以て全く徒勞に屬するものなりとの評をなすものあり余も亦敢て之を俄に有効なるへしとは信せされとも然れとも此等の建議は將來漸く一夫數婦の陋風醜俗たる所以を世に明かにして次第に一夫一婦の美風正俗に歸せんとするの輿論を生産するの手段となるものなれは余は決して之を徒勞に屬するものとは信せすして大に之を贊成せんと欲するなり。

○閑　日　月　　一　ツ　の　女

昔しの武士こそ優しかりけれ、源太景季は箙に梅を插み、太夫敦盛は腰に笛を帶びぬ、彼のグラッドストン翁がホーマーの詩を愛讀するなど亦た慕ふべき所ろなり。思ふに現今の志士切りに熱中熱勉して一つの事に奔走盡力せらる、芳志謝すべしと云へとも亦た其玉鉢の痛まんとを恐る、願はくは少く悠々として遊び玉へ。

○濁　世

改進新聞に連載したる小說「濁世」は、高等女學校及び同校長矢田部良吉君を誹毀したるものとし、矢田部君之を出訴し、近日將に其の對審あらんとす。彼の賄賂事件公判の爲めには、前後凡そ三十名程も呼出され、關らざる人々迄で法廷に於て平素の品行を口走りたるとあり、而して最近の公判によれば醜源いよく現はれ出でんとする也、故に望むらく此の第二の公判に於ては、博士、教授、宣教師、女秀才なぞの又々召出さるゝやうの事なく、尙更ら夢にも望むまじき醜因の發見せられんとなどあらざるやうと、只管らに熱望する也。

○高等女學生

現今の如き亂雜不調子且つ高尙ならざるの世界に於ては、麵包を求めて石を與へらるゝとの多きは實に止を得ざる也、今や高等女學生を求むるの地元來乏しきにあらず、只だ人の之を求めんとするものゝ乏しきを見る、夫れ俗々の凡人多くは之を求めず、故に彌よく高等女學生の必要を感じ、其の世に出でゝ諸界を感化するを望むといよく切なり。山を見よ、日光先づ其の頂きに當る、而して頂きのかゝやくさき麓尙ほ黑きにあらずや。

○寡夫及び寡婦

其數大ひに相違し、大率ね寡婦の數を多しとなす、晚近の調査に據るに、米國に於ては、寡夫五十八萬九千六百四十四人にして寡婦一百四十一萬○六百八十四人即はち寡婦八二一○四○の超加なり。大英國に於ては四十五才の齡ひを限りて其多少を比ぶるに寡夫七三九二八にして寡婦一九三六八○即はち寡婦一一九七五二の超加なり。佛國に於ては寡夫百人に付寡婦百九十四人あり。(ウエストミンスター、レビウ)

外　報

○廢娼會議　英國大陸其他連合の萬國廢娼會議は、九月十日より十四日に至る迄でイタリア國ゼチバに於て開かる、此は每三年一會の定めにして頗ぶる有力なる集まりなるが、彼のジヨセフヒン、バツトレル夫人は其良人の病により之に臨む能はざるべしとて大ひに歎くもの多し。

○結婚式　ファイフ侯と皇太女ルイ内親王の結婚は去月十七日其式を擧げたり。

內　報

○女子工藝學校及附屬授產場　佐々木豐壽女史之を發起し、專ぱら女子に適應する技藝を教授し、傍はら女子に必要なる學科を兼修せしむるよしにて、現今其資金募集中なり、彼の獨立女學校と云ひ、亦た此の校塲と云ひ、婦女子が手を以て糊口にするの途いよく增加するは大賀すべきと也。

○美術志願者多し　上野公園内なる美術學校は今度生徒百三十五名を募集せしに昨日までは各府縣より申出しは六百名の多きに達したる由尤も入學試驗の執行は來月中旬なりと。

○婦人の世界　今回本派本願寺大學林教授中川太郎宮島鈴八田逸正直の三氏が發起人と爲り目頭の如き女學雜誌を發兌することなるが其目的は學術は暫く置くも兎角生意氣が先に立ち敗德者の最多き當今の女生を矯正し學術と淑德と俱に完全の婦女を作るに在りと(京都日報)

○教則改正　現在施行の尋常師範學校教則は男女同一なりしが女子の爲めには實際不適當の廉不尠さるを以て男女を區別し女子の分は餘程簡易にさるゝ由にて昨今其審査に着手されしと聞く(茨城日報)

○基督教徒の幼稚園　神戸市にては已に神戸部と兵庫部に一箇づゝ幼稚園あり目下仲町部にも一箇の幼稚園を設けんとの計畫ある處神戸部の基督教徒は此外に仍一箇完全なる大幼稚園を設置せんとの事を計畫し手筈夫々整ひ居る趣にて其豫定の諸事は前年以來同所に居留する米國基督教家ハウ女は同國にて幼稚保育科業專門の人なるを以て同女を園長とし園舍の構造、幼稚保育の方法とも我國從前のものと異にし其位置は山手なる兵庫縣尋常師範學校の上の方に定むる筈なるよし(大阪朝日新聞)

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

廣告

東洋英和女學校計畫一斑

當校暑休ノ爲六月廿九日閉校來ル九月七日開校寄宿生ハ當日入舍通學新入生ハ同九日入校アルベシ

當校ハ我日本ノ婦女子ニ更ニ高尚完全ナル教育ヲ授ケンカ爲メ從來ノ普通科學期ニ更ニ二年ヲ加ヘ高等科ヲ設ケ特別ニ數學簿記和漢文學地理歷史心理學教育學等ヲ教授シ英語科中ノ數學ハ之ヲ止メ其時間ハ英文學及ヒ作文ニ用ユベシ此改正ハ文部省教員學力檢定試驗ヲ受ケ教員免狀ヲ得ント欲スル者ニハ殊ニ便利ニメ甚好都合ナルベシ

所望者多クシテ一級ヲ編成スルニ足レバ別ニ彩色及繡鳥ノ科ヲ設クヘシ

且教師ヲ增加シテ充分適當ナル教員ヲ持續センヿヲ勤ムベシ

又九月ニハ新ニ科程規則ヲ定メ上梓シテ配布スベシ

現今ノ規則書ヲ望ム者又其他照會ヲ欲スル者ハ左ノ處ニ書翰ヲ投シ或ハ自ラ御出頭アリタシ

明治廿二年八月

麻布東鳥居坂町十四番地

東洋英和女學校

○女生徒募集廣告

當校今般從來ノ組織ヲ一變シ教授上學年上大ニ改良ヲ加ヘ殊ニ和漢學ノ程度ヲ進メ併セテ歷史地理物理化學博物化學生理家政育兒法等ニ力ヲ用ヒ卒業後將來社會ニ出テ婦女ノ務ヲナスニ當リ實地ニ應用スルヲ以テ養成ノ主眼トス有志ノ者ハ來學アレ

望ノ者ニハ本邦書ヲ教授ス教員西洋人四名本邦人七名九月十二日十三日ニ入學試驗ヲ行フ詳細ハ當校ニ就キ或ハ書面ニテ問合セラルヘシ

明治二十二年八月

築地新榮町三十八番館

立教女學校

私立明治女學校 新入生徒募集

本學年試驗相畢り本科卒業生一名漢學科卒業生七名有之候

○右に付最下級及び欠員ある級に對し新入生徒を募集す○規則書塾舍心得書入用の方は郵劵二錢封入申込あらん事を請ふ

私立明治女學校 高等科 自由科 新設

本校開始後既に五年定めの如く第一回本科卒業生を得たるに付兼て預告したる如く今後新に高等科を設け且つ別に自由科を添ゆ○高等科一日二時間授業三年にして科目及受持講師大畧如左

日本歷史、心理學、倫理學		植村正久
歐米古今代史	米國技藝士	木村熊二
生物學	米國理學士	内村鑑三
理化天文學	理學士	木村駿吉
經濟學		金谷昭
英文學		未定
社會學		嶋田三郎
支那歷史、日本文學、教育學		巖本善治

（未確定）

之を正科とし別に自由科を置き哲學、數學、獨逸語學、比較宗教學、家政學、音樂、書學、を教授し望の者に自由受業せしめ且つ撰科生には右正科別科の内三四を撰み學ぶ事を得せしむ

右高等科有志の諸君は八月二十五日迄に申込あるべし凡そ本校普通科五年修業の學力に相當するものは十九名に至る迄で入校を許す

私立明治女學校 文藝講話 預告

次學年の秋を以て始め時々文學々術上の大家に請ふて數回連續の講話會を開き廣く來聽を許して少さか文藝女學の普及に一助せんと欲す

東京飯田町三丁目卅二番地

九段坂上燈臺乾立する所ろ

私立明治女學校

遞信省認可

生徒募集廣告

本校々舍新築落成ニ付本科豫科生共入學ヲ許ス志願者ハ至急申込アルベシ但九月六七ノ兩日入學試驗ノ事

横濱山手百七十八番

フェリス英和女學校

看病婦學校生徒募集廣告

●本校學年ハ明治二十二年十月七日ヨリ同二十三年六月下旬ヲ以テ終ル●第一期ノ始ニ有ラザレバ入學ヲ許サズ故ニ九月一日迄ニ必ズ申込ヲ爲ス可シ●教授法ハ講義口授臨床講義等看病ノ爲メ必用ノ事ハ洩レナク教授ス●毎月食費金貳圓ノ外要セズ但シ炭油部屋教科書病室用服等總テ本校ヨリ給ス●學則校則入學志願手續書等望ノ方ヘハ相渡ス可シ若郵便ニテ申込アラバ直ニ送附ス

京都烏丸通京都看病婦學校

女生徒募集公告

本校ハ九月十六日始業豫科一年生ヨリ各級入學ヲ許ス志願者ハ入舍學共九月十日迄ニ申込ベシ十二日ヨリ三日間入學試驗ヲ執行規則書ハ郵劵二錢ニテ送付ス

京都市今出川通寺町西入

明治二十二年八月

同志社女學校

○女生徒募集廣告

九月十日より始業米國女教師三名本邦教師九名にて和漢英其他普通學を授く入學志願者は同日直に申込べし

芝白金猿町五十三番地

私立頌英女學校

發兌

八月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日
九月。七日 十四日 廿一日 廿八日
十月。五日 十二日 十九日 廿六日
十一月。二日 九日 十六日 廿三日

定價

一册。六錢 郵稅。一錢 (但府內無郵稅)
十册。五十八錢郵稅。十錢 (同前)
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衞門町暖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町貢明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文港堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年八月二十一日印刷
明治二十二年八月二十四日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.